

週日の説教

金 大烈 神父 2008年9月30日(火)

《互いに相手の気持ちを思いやりましょう》

今日の第一朗読(ヨブ9・1 - 12、14 - 16)の主人公は、ヨブです。福音に入る前にヨブについて少し説明をしておきます。人間に起こると考えられる出来事のうち、一番悲惨な出来事を書いたのがヨブ記です。ヨブは、いつも正しい生き方をした人です。それなのに考えられないほど悲惨なことに襲われます。息子達が、死んでしまい、一番愛する妻からも嫌がられる状態になり、物乞いする人より惨めになります。

ヨブ記を通して私たちが考えなければならないのは、そのような悲惨なことに襲われても、ヨブは一度も神様を呪ったことがなかった、ということです。神様ではなく、自分自身を呪いました。

今日の第一朗読に、「なぜ私は生まれたのか」と書いてあります。彼は、どのように考えても正しい生き方をしていたのに、なぜこのようなことに襲われなければならなかったのか、と悩み、辛い気持ちで嘆きを表しました。しかし、最後まで「神様はいない」、「神様は悪い存在」、「神様は呪われるもの」とは一度も口に出しませんでした。むしろ逆に、正しい生き方をしていると思いこんでいる友達が二人来て、「おまえは、何か罪を犯したから、このように罰せられるのだ。反省をしたほうがよい。」と強く責めます。しかし彼には、人間として、神様の息子として、間違えた道を歩いた記憶がありません。それでも、二人の友は更に強く言います。「神様は慈しみ深い方だから、罪を犯さない限りこのような悲惨な状態にはなさない」と。彼は、最後まで「私が間違えたのかもしれないが、はっきり分からない」と言い続けます。

結局、神様が現れて、あなたはよく耐えられたという励ましの言葉で彼を褒め、逆にヨブを責めていた友達を叱ります。

たぶん、私たちがヨブのような不幸に襲われることはあまりないと思います。むしろ私たちは、小さなことなのに自分の気に入らないことにぶつかるたびに、神様を忘れたり、神様はなぜこのようなことを私になさるのかと憎しみを見せてしまいます。

ヨブ記を通して、「全知全能である神様は、いつも私のためにいらっしゃる」ことを意識しなければなりません。そして、もし間違いがあった時には、自分の行いのために起こった、と答えられることが必要ではないかと思えます。そのような練習ができれば、人との関わりの中でぶつかりあいが生じて、自分が何か間違えているのかもしれないと振り返ってみる余裕ができます。しかし、いつも他人の責任にする癖のある人は、わずかなことでもいつも相手を冷たい目で見ます。「あの人のせいだ。」そういう言葉から解放されなければ、どのように環境が整えられても私たちはいつも不幸を感じます。それを意識しましょう。

福音(ルカ9・57 - 62)に入りましょう。

正確な年代は覚えていませんが、紀元前900年頃、イスラエルは二つに分かれます。北は北イスラエル、南はユダという違う名前の国になります。南のユダはエルサレムが都となり、北イスラエルはサマリアが都になります。同じ民族なのに二つに分かれ、政治的なことでも憎みあいます。そして、紀元前721年、アッシリア人の侵攻があります。北イスラエルのサマリアの人たちは激しく抵抗をしますが、力不足のためにたくさんの人々がサマリアで殺されました。そして完全にアッシリアの属国になってしまいます。そのときから、アッシリアはいろいろな国の人々をサマリアに移します。ですから、サマリアの人々は純粋なユダヤ人ではなくなり、いろいろな民族の血が混じりあい始めます。それを見て、南のユダは、北イスラエルを汚(けが)れた民族だと言い、異邦人扱いします。同じ民族からも異邦人からも責められ、サマリア人には歴史的に深い傷があります。そのために、他の民族に

対して排他的になるのは仕方のないことでした。だから、南のユダヤ人であるイエスという人がサマリアに入ろうとしたとき、サマリア人は拒みました。サマリアを通らず、別の道を通って直接エルサレムへ行ってほしいとはっきり言いました。それを聞いた弟子達は、この人々を罰しましょう、と言います（本当はできるわけもないのに・・・）。しかしイエス様は、弟子達をしかり、サマリア人には何も言わずに、違う道を通られました。それは、イエス様が誰よりも北イスラエルの痛みについて理解してくださったからです。もし反対に、サマリア人が歓待の様子を見せたとしてもイエス様の立場では本当の気持ちがわかってしまったでしょう。

この福音を通し、考えてみましょう。

私たちはどのような関わりを持ってもぶつかりあいが生じます。その時、まず、相手がなぜそういう態度を見せたかを理解しようとする姿勢が何よりも必要ではないかと思います。イエス様は自分を拒んだ人々にさえ、この人たちには傷があるのだから当然な反応だと考え、だから自分達が違う道を行ったほうがよいと弟子達に教えています。ご聖体をいただいている私たちでも、小さなことに腹をたてたり、いつも相手を責めようとしていないでしょうか。

お母さんは赤ちゃんが泣いたら、泣き声に対して嫌な顔をするより、なぜ泣いているかを考えますね。おなかがすいていないか、体の具合が悪くないか、と。

このような思いやりの心が、私たちのふつうの関わりでも必要なのではないかと思います。ある人が全然予想のつかない反応を見せたとき、あの人は変わってしまったのではないかと思って、避けるように振る舞うのではなく、なぜそのように急に違う反応を見せているのか、わけがあるのだろう、痛みや傷があるのだろう、と相手の立場に立って見ようとする心が何よりも必要ではないかと思います。もし、これができなければ、善も悪も区別がつかなくなってしまいます。もし私たちが善の道を歩んでいるという自信があるならば、少なくとも相手の立場に立ってみようとする心がなければ何もできないと思います。子どもは親の立場で、親は子どもの立場で、信徒は司祭の立場で、司祭は信徒の立場で。このようなお互いにお互いのことを考えてあげる姿が必要ではないかと思います。

私たちは、サマリア人がイエス様を拒んだことがよくない、とすぐに考えてしまいがちですが、彼らが受けた傷みを考えたら十分に納得はできるわけです。

ありがとうございました。